

WOODY VALLEY GTO LIGHT REVIEW

CROSS COUNTRY MAGAZINE FRIDAY 29 JUNE ,2018



GTO ライト、クロスカントリー飛行をやって最初の 2 時間で、ウッディーバレー社がいかに素晴らしいハーネスをつくったかを実感した。

手元に届いたGTOライトは、専用の軽量リュックサックに入っていて、パラグライダーを収納する超軽量セルバッグもついてきた。良い感じだ。



まず広げると、設計配置はXレイテッド7とかなり似た感じだが、もちろん、全面的に軽量素材を使用していて、はるかに軽い仕上がりになっている。カラビナを含めてLサイズで3.025gだった。

このリュックサックとセルバッグは、あわせて900グラムと驚きの軽さ！これでパラシュートデプロイメントコンテナを入れても全部でほぼ4kg。空港の手荷物預けに出すには気を使うが、ハイク&フライには最高だ。

SMスタンダード生地 of 機体も入れるのに、たいして苦勞しなかった。

ハーネスに話を戻すと、ぶら下がった感じもほとんど X レイテッド 7 と同じだった。ノーマルなバックルのおかげで取り扱いが早くて楽だ。このことはライトネス 2 を思い出させる。GTO ライトは軽だけでなく、例えば超軽量のスカイウォーク レンジ X アルプス CV はもちろん、オジウム 2 に比べても、「普通の」ハーネスのようにとても使いやすい。

重量軽減に寄与していると思われるのが、私も初めて見るハーネス素材である、ポリウレタンで黒くコーティングされた伸縮性のあるポリエステル素材だ。

配置設計につてだが、最初にぶら下がった瞬間から GTO ライトの脚サポートは良いな、と思った。X レイテッド 7 では、フットプレートを頑張って踏まなくてもよいようにと、長年に渡ってこのセッティングをいじり続けてきたものだ。



GTO ライトの配置設計はさらに良好なサポートを実現した。背中感触はピッタリと快適で、幅の狭い座板は左右に固いロッドがあって剛性を出している。今、座板と言ったが、実際は、中のジッパーを開けてみると、それはバックプロテクションの上側の表面にとっても剛性がある、その上に座っているかたちだ。しかし、ぶら下がってみると、それは本当に座板の感触である。



緊急パラシュートのシステムも、X レイテッド 7 に比べてさらに進化している。XR7 ではジッパーが割れることで開いていたが、このシステムでは厳密なプレフライトチェックが要求された。GTO ライトでは、ジッパーの代わりにプラスチック ワイヤー。を用いている。パラシュートコンテナは 1 個だけで、他にフロントコンテナに軽量ドラッグシュート用のスペースがある

計器マウントのサイズはちょうどぴったりだ。2〜3cm 高く設定することもできる。そして、オーディー、フライマスター、小さめのスマートフォンがギリギリ収まる。収納も良好。バック コンテナは十分な大きさがあり、さらに座面の下に 7〜8 リットルの容量のバラストポケットがある。

そして何より注目されるのが、エアロダイナミックなフェアリングである。美しい流線形の外観とともに、高速グライド時の性能向上ももたらしてくれる。X レイテッド 7 のものの長さはないが、どちらも折れてしまうようなプラスチック製チューブは使っていない。ウッディーバレー社は、今回もセミリジッドの空気取り入れ口というシンプルな技を活用した



飛んでみると、その快適な乗り心地は大変すばらしく、ロールのレスポンスはいつも良好で、効き過ぎでも安定し過ぎでもない。体に強く当たるところもなく、それでいてしっかりとホールドされている感じだ。座板の無いことを生かして、パイロットの足先から背中、肩ベルトまで、快適にピッタリとした感じである。ウッディーバレー社が言うところの「オートバイ スタイル」バックプロテクションが背中の上方まで伸びていて、さらなるサポートとなっている。

グライドでは、デザイナーの説明によると、フェアリングが方向安定性に寄与しているとのことだ。ハーネスの向きをしっかりと進行方向へ保ってくれている。パイロットがフットバーを踏み込むときはどちらか片足から踏んでいくが、これが一部のポッドハーネスでは、ハーネスの偏揺れにつながり、滑空性能を損なっている。

私の飛んだGTOライトでは、キレイに真っすぐの向きを保ち、説明のとおりフェアリングが役立っている気がした。スピードシステムのラインが動く事で、新素材への擦れの影響が出るか気になったが、これは時間がたってみないとわからないところだ。

結論として、これは素晴らしいハーネスだ！私自身、長年に渡ってフェアリング付きの軽量ハーネスを探し求めてきたが、この潜在的に大きな可能性を秘めたマーケットに対するメーカーの成果が上がっていなかった中で、ウッディーバレー社は、ついに初めて、達成したと言えるだろう。

試乗パイロット：ヒュー・ミラー